

# バドルッディーン・アイニーの学問的キャリア —mamlook朝ウラマーの一事例—

中 町 信 孝

## 1. はじめに

mamlook朝後期の知識人（ウラマー、単数形はアーリム）であるバドルッディーン・アイニーBadr al-Dīn Maḥmūd al-'Aynī (1361-1451、以下アイニーと略記)は、中世アラブ史研究者の間では、年代記『真珠の首飾り *'Iqd al-Jumān fī Ta'riḥ Ahl al-Zamān*』(以下 *'Iqd*と略)の著者として名高い。しかし当時のエジプト社会において彼は、文筆家としてのみならず、ハナフィー法学派の大カーディー (qāḍī al-quḍāt) やカイロの市場監督官 (muḥtasib) を勤め、スルターンの顧問や外交使節として活動するなど、政治的、社会的にきわめて地位の高い人物であった<sup>1</sup>。

イスラーム的知識の習得、教育に専念すべきウラマーにとって、本来ならば政治的世界への関与は忌避されるべきことである。しかし実際には、支配エリートと良好な関係を取り結び、カーディーや官僚としての役職を得るウラマーも決して珍しくはなかった<sup>2</sup>。従来の研究では、アイニーの政治的キャリアはそのようなウラマーの世俗的側面を代表するものとみなされ、多くの研究者はアイニーと支配エリートであるmamlook出身者たちとの親密な関係を指摘し

1 アイニーの経歴の概要は、W. Marçais, "AL-'AYNĪ," *Encyclopedia of Islam*, new ed. vol. 1, pp. 790-791を参照。また、Şāliḥ Yūsuf Ma'tūq, *Badr al-Dīn al-'Aynī wa-Athar-hu fī 'Ilm al-Ḥadīth*, Beirut, 1987も参考になる。なお本稿で年月日を併記する際は、先にヒジュラ暦、スラッシュの後に西暦の順で記す。

2 たとえば、14世紀のウラマーの一人、スプキーは、ウラマーによる現世利益の追求を批判したが、スプキー自身は非常に高い社会的地位を獲得した。三浦徹「ウラマーの自画像：知の探求と現世利益」『アジア遊学』7 (1999), pp. 114-117を参照。

てきた。たとえば、15世紀カイロにおける「文民エリート」の移動を分析したPetryは、「ルーム（アナトリア）地方からの移住者」であるアイニーが若年期から習得していたトルコ語の運用能力が、支配エリートの間で地位を高めていくのに役立ったと指摘する<sup>3</sup>。中世アラブにおける知識伝達を分析したBerkeyは、アイニーがスルターンのムアイヤド・シャイフ（在位1412-21）との個人的な結びつきによって、ムアイヤディーヤ学院における教授職を得たことに触れる<sup>4</sup>。その他、支配エリート層の学問・文芸活動を分析したSchimmelやFlemmingらの研究は、スルターン・バルスバーイ（在位1422-38）の御前でのアイニーによるアラビア語とトルコ語での歴史講話の逸話に触れる<sup>5</sup>。Broadbridgeは、アイニーとマクリーズィーal-Maqrizī（1364-1442）、イブン・ハジャールIbn Ḥajar（1372-1448）という3人の同時代人による「学問競争（academic rivalry）」に焦点を当て、彼らが支配エリートとの関係をいかにして取り結んだかを考察している<sup>6</sup>。

これらの研究がほぼ共通して指摘するのは、アイニーがトルコ語を理解したのために、当時の支配エリートであるマムルークたちに気に入られたということである。実際に、アイニーと同時代人であるマクリーズィー、イブン・タグリービルディーIbn Taghribirdī（1409,10-70）、サハーウィーal-Sakhāwī（1427-97）などの歴史家は、アイニーが君主の御前においてトルコ語で歴史講話を行っていたことを書き留めている [*Sulūk*: 4/698; *Manḥal*: 11/195; *Ḍawʿ*: 10/132; *Tibr*: 3/143]。当時すでに、アイニーのトルコ語能力と彼の社会的栄達との間には、大きな相関があると認識されていたことが窺えるのである。

確かに、外来の支配集団であるマムルーク出身者の中にはアラビア語を解さ

3 Carl Petry, *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton, 1981, pp. 69-70.

4 Jonathan P. Berkey, *The Transmission of Knowledge in Medieval Cairo: A Social History of Islamic Education*, Princeton, 1992, pp. 100, 153.

5 Annemarie Schimmel, "Some Glimpses of the Religious Life in Egypt during the Later Mamluk Period," *Islamic Studies* 5 (1965), pp. 356-357; Barbara Flemming, "Literary Activity in Mamluk Halls and Barracks," *Studies in Memory of Gaston Wiet* (ed. M. Rosen-Ayalon, Jerusalem, 1977), p. 252.

6 A.F. Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt: al-'Aynī, al-Maqrizī, and Ibn Ḥajar al-'Asqalānī," *Mamluk Studies Review* 3 (1999), pp. 85-107.

ない者が多く、それゆえに、アイニーのようなトルコ語を解するイスラーム的知の専門家が重宝がられたことは想像に難くない。しかし、トルコ語能力とそれによって獲得した支配エリートとの私的関係のみが、アイニーの出世の要因であったと見なすことはできない。アイニーは政治的人物である以前に、ウラマーとして名を成した人物であったからだ。

本稿では、支配エリートの知己を得て官職に就く前の、アイニーの修業時代に焦点を当て、彼がどのような学問的キャリアを積んでいったのかを分析する。

## 2. 史料

上述のとおりアイニーは、年代記 *'Iqd* の著者として知られるが、それ以外にも『満月の歴史 *Ta'rikh al-Badr fī Awṣāf Ahl al-'Aṣr*』(以下 *Badr* と略記) なる歴史書を著している<sup>7</sup>。これらはいずれも編年体形式の年代記であるが、その本文中にはしばしば、「弱きしもべ」「神の恩寵に乏しき者」といった謙譲表現と結びついて「編纂者 (jami')」「著者 (mu'allif, musaṭṭir)」との表現がなされ、1 人称単数形による文章が挿入されることがある。これらの文章は、アイニーが自らのことを語っているいわば自伝的な情報であり、アイニーの個人史を知るための格好の素材を提供してくれる。

ただし、本稿で用いた *Badr* の写本<sup>8</sup>では、書写者であるアイニーの実弟アフマド Shihāb al-Din Aḥmad al-'Aynī が、「書き手 (kātib)」として登場し、1 人称単数形による文章を挿入することもある。つまり、アイニー本人と弟のアフマドとが、それぞれに 1 人称記述を行っており、その情報がどちらに由来するものなのかをその都度判断する必要がある<sup>9</sup>。

7 これらアイニーの著した歴史書については、拙稿「アイニーに帰せられた 4 年代記の成立年代と執筆意図」『西南アジア研究』65 (2006), pp. 41-55 を参照。

8 *Badr*/S を所蔵するスレイマニエ図書館のカatalogでは、この写本を *'Iqd* として分類しているが、内容から鑑み *Badr* 写本ととらえるのが正しい。拙稿「アイニーの 2 年代記の執筆手順とその史料的价值」『イクド・アル=ジュマーン』第 17 巻前半部の出典分析『東洋学報』86:4 (2005), pp. 033-034 参照。また、収載年代において *Badr*/S に継続している *Badr*/BN も、同様にして *Badr* 写本ととらえるべきである。

アイニー個人史にかんする史料としては、この他にも「死亡録 (wafayāt)」と呼ばれる作品群がある。これは言い換えれば人名辞典であり、主にウラマーなど都市の名士たちが生前になしたことを記録した伝記記事の集成のことである。マムルーク朝後期において代表的な死亡録に、サハーウィーの執筆したヒジュラ暦9世紀の死亡録*Daw'*と、イブン・タグリービルディーが著した死亡録*Manhal*があるが、このどちらもアイニーについては詳細な伝記を収めている [*Daw'*: 10/131-135; *Manhal*: 11/193-197]。ただし、サハーウィーの著作については年代記*Tibr* [3/140-148] に収められたアイニーの伝記の方がより詳細な記述を含んでおり、またイブン・タグリービルディーに関しても年代記*Nujūm*におけるアイニーの伝記を併せて参照する必要がある。

アイニーと同世代の歴史家であるマクリーズィーとイブン・ハジャルは、当時のさまざまな出来事をアイニーと共有しており、この両者の記した年代記*Sulūk*と*Inbā'*、および後者による人名辞典*Durar*は、アイニー自著の情報を確認するためには欠かせない史料となる。しかし、どちらもアイニーよりも先に亡くなっているため、アイニーの伝記を残してはいない。ただしイブン・ハジャルはカーディー列伝*Raf'* [432] の中で、アイニーにかんするまとまった記述を残している。

史料の略称は以下のとおりとする。

*Badr*/S: Al-'Aynī, *Ta'riḫ al-Badr fī Awṣāf Ahl al-'Aṣr*, MS Süleymaniye 830.

*Badr*/BN: —, —, MS Arabe (Bibliothèque Nationale de France) 1544.

*Ḍaw'*: Al-Sakhāwī, *Al-Ḍaw' al-Lāmi' li-Ahl Qarn al-Tāsi'*, 12 vols., Beirut, n.d.

*Inbā'*: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, 9 vols.,

Hayderabad, 1967-76.

*'Iqd/Ah*: Al-'Aynī, *'Iqd al-Jumān fī Ta'riḫ Ahl al-Zamān*, MS Ahmet III

9 なお、拙稿「アイニーに帰せられた」で検討したとおり、*'Iqd*と*Badr*にはそれぞれ要約版が存在するが、煩雑になるため本稿では省略した。また、Imān 'Umar Shukrī, *al-Sultān Barqūq Mu'assis Dawlat al-Mamālik al-Jarākisa: min Khilāl Makhtūṭ 'Iqd al-Jumān fī Ta'riḫ Ahl al-Zamān li-Badr al-'Aynī*, Cairo, 2002 は*'Iqd*写本のスルターン・バルクーク治世にあたる部分を校訂したものと銘打たれているが、使用した写本は*'Iqd*正本ではなく、*'Iqd*と*Badr*それぞれの要約版に相当するため、これも本稿では割愛した。

(Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi) 2911, a17-a19.

'*Iqd/Q*: —, —, 'Abd al-Rāziq al-Ṭaṇṭāwī al-Qarmūṭ ed., 2 vols., Cairo, 1985-1989.

'*Iqd/V*: —, —, MS Veliyyüddin Effendi (Bayazit Devlet Kütüphanesi) 2394.

*Manhal*: Ibn Taghribirdī, *Al-Manhal al-Ṣāfi wa-l-Mustawfi ba'da al-Wāfi*, 12 vols., Cairo, 1985-2007.

*Mu'jam*: Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Buldān*, 5 vols., Beirut, n.d.

*Nujūm*: Ibn Taghribirdī, *Al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa-l-Qāhira*, 16 vols., Cairo, n.d.

*Raf'*: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Raf' al-Iṣr 'an Quḍāt Miṣr*, Cairo, 1998.

*Sulūk*: Al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifat Duwal al-Mulūk*, Cairo, 1939-72.

*Tibr*: Al-Sakhāwī, *Kitāb al-Tibr al-Masbūk fī Dhayl al-Sulūk*, vols. 1-3, Cairo, 2002-2005.

### 3. アイニーの本名と出生

各種史料中では、著者アイニーの本名は、Badr al-Dīn Abū Muḥammad Maḥmūd b. Aḥmad b. Mūsá b. Aḥmad b. Ḥusayn b. Yūsuf b. Maḥmūd al-'Ayntābī al-Ḥanafīとされる<sup>10</sup>。本人のイスマ（名）であるMaḥmūdから6代遡る祖先のイスマであるMaḥmūdまでが記されており、少なくとも彼の家系が6代前からアラビア語のムスリム名を有していたことが分かる。ニスバ（由来名）については、アインターブ 'Ayntāb出身者であることを示すal-'Ayntābīか、それを短縮したal-'Aynī、および、ハナフィー法学派にちなむal-Ḥanafīが併記される。また地名のニスバとしては、出生地を示すal-'Ayntābīの他、彼の家系がアレppoを起源（al-aṣl）とすることを示すal-Ḥalabī、居住地または死亡地がカイロであることを示すal-Qāhirīも併記されることがある<sup>11</sup>。

10 ラカブ（称号）はBadr al-Dīnだが、Jamāl al-Dīnと記すものもある。クンヤ（あだ名）としてはAbū MuḥammadとAbū al-Thana'の2つのクンヤを有していたことが知られる。

11 この他、al-Sharūḥīとのニスバが付されることもあるが、その由来は明らかでない。

アイニーの生年月日は762年9月27日/1361年7月30日<sup>12</sup>、出生地はアインターブのKaykan街区 (darb) とある。アインターブとは、現在トルコ共和国南東部にあるガズィアンテプGaziantepのことである。

マムルーク朝時代のアインターブは、アレppo州の一部であり、地理的にも大都市アレppoとの関係の深い都市であったが、しばしばマムルーク朝とモンゴルやトルクメンの諸勢力との間での係争地となっていた<sup>13</sup>。都市の外部においてはトルコ語話者であるトルクメン遊牧民が活動していたが、都市住民の間ではアラビア語を話す者も多かった。

たとえば14世紀前半に活躍した旅行家のイブン・バットゥータIbn Baṭṭūṭaは、アインターブには立ち寄らなかったものの、他のアナトリア諸地域に足を伸ばしている<sup>14</sup>。彼はカイセリ等の諸都市において、「アヒー」と呼ばれるリーダーが率いる若者集団<sup>15</sup>によって歓待されたが、彼らの話すトルコ語が理解できなかったという。一方、アラビア語を解したウラマーとは、不自由なく意思疎通ができたようである。このようにイブン・バットゥータの旅行記に見られるアナトリア諸地域の言語状況は、トルコ語とアラビア語との2言語併用が一般的であったと考えられる。

アインターブでの、アイニーの周辺の言語状況については、アイニーの弟による以下の記述に注目すべきであろう。これは、アイニーと弟が共に師事したJibril al-Baghdādī (後述する【表1】の(10)の人物)の授業風景の描写である。

彼は朝の礼拝から正午まで授業のために座り、彼のもとでアラブとアジヤム ('Ajam) の学生が70名学んでおり、私も彼らとともにあった。[Badr/

12 アイニーの西暦での生年を拙稿では1360年としてきたが、これは正しくない。この誤りは、Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Litteratur*, 5 vols., Leiden, 1891-1949, vol. 2, p. 52にある誤ったデータを引用したことによっている。ここに謹んで訂正したい。

13 アインターブについてはMarius Canard, "‘AYNTĀB," *Encyclopedia of Islam*, new ed. 1/791-792; Besim Darkot & Hikmet Turhan Dağhoğlu, "AYINTAB," *İslam Ansiklopedisi* 2/64-67を参照。

14 イブン・バットゥータ著、イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注『大旅行記』（平凡社、1996-2002）3/262-397。

15 「アヒー」と若者集団については『大旅行記』3/441-446。

S: 201b-202a]

「アジャム」とは通常ペルシア語を話す人々のことを指すが、ここでは「アラビア語ではない言語の話者」との意味から、トルコ語話者のことととらえるべきだろう。このような授業風景を、アイニーもまた経験していたとするならば、アイニーは日頃からトルコ語話者と接する機会を持っていたことが窺えるのである。

【図1】西アジア地図



#### 4. 祖父ムーサーと父アフマド

アイニーの祖父であるムーサー-Sharaf al-Dīn Mūsáについては、アイニーが自分の父親から聞いたとする自著中の記述の他には、同時代の情報はない [ 'Iqd/V: 6; 'Iqd/Ah: a17/61a; Badr/S: 28a]。それによるとムーサーは、さらにその父、つまりアイニーにとっての曾祖父であるShihāb al-Dīn Aḥmadとともに、ルーム地方のアンカラからアレppoへと移り住み、そこでアイニーの父に

あたる Aḥmad (アイニーの曾祖父と同名) が生まれ、さらにその後、「より良き地 (balad khayr)」であり「空気が良く水がきれい」なアインターブへと移った。祖父はその地でカーディー Kamāl al-Dīn 'Umar al-Shāfi'ī なる人物のもと、「司法の代理 (niyābat al-ḥukm)」を務めたが、それは彼が「契約と文書の作成 (ṣan'at al-shurūṭ wa-l-tawrīq)」で能力を持ち、書を良くした」ためであった。彼の役職は、アインターブから水源を発するサージュール川の管理人 (mutawalli) であり、その職務内容は、しばしば氾濫を起こす同川の監督 (naẓar) や支出の記録 (kitāba) であった。このような記述からこの人物が、「カーディー」との敬称で呼ばれる法学者であると同時に、文書行政に関する技能を身につけた書記でもあったことが見て取れよう。サージュール川との関わりで 713/1312, 13 年と 731/1329, 30 年の条にこの祖父についての記述があることから、彼はこの両年を含む期間にサージュール川の管理人職を勤めていたと考えられるが、彼の没年は不詳であり、ただアインターブで亡くなったことだけが記されている。

アイニーの父アフマド Shihāb al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad については、同時代史料中に伝記記事を載せるものもあるが、いずれもアイニー自著中の記述からの部分的な引用となっており、アイニーの自著中の伝記記事がもっとも多くの情報を含んでいる [Badr/S: 128a; Inbā': 2/107-108; Manhal: 2/231]。

アイニー父の没年は 784 年 7 月 26 日/1382 年 10 月 4 日であり、その当時の年齢は「60 歳を超えていた」とある。ここから彼の生年をヒジュラ暦 720 年前後と推定でき<sup>16</sup>、アイニーの一家がアレppo に定着した時期もおおよそその頃と考えられる。

アイニー父の経歴については、「彼は 30 年間、司法においてカーディー職の代理を務め (nāba fi al-ḥukm 'an al-quḍāt)、その後しばらくの間、アインターブのハーキムとなり (istaqalla ḥakiman)、それから没した」とある。「カーディー職の代理」とはアイニーの祖父の務めた「司法の代理」と同内容と考えられるが、60 年余の生涯のうちの 30 年を代理として務めたとすると、その後の「ハーキム」、すなわちカーディーの職にあった期間はほんのわずかであったと

16 サハーウィーは、アイニーの父の生年をヒジュラ暦 725 年としているが [Daw': 10/131]、これではアイニーの父が「60 歳を超えていた」との記述と矛盾する。



考えられよう。またアイニーが記す、「彼は実定法 (furū') と法源 (uṣūl) に対応できる法学者 (faqīh) であり、法的文書作成 (al-makātabāt al-shar'īyya) や行政文書 (al-sijillāt al-ḥukmiyya) の諸事に熟達していた」との人物描写からは、彼がアイニーの祖父と同様に、法学者としての知識と行政官僚としての技能の双方を身につけた人物であったことがうかがえる。

またアイニーは自著中の別箇所において、アレppoのシャーフィイー派大カーディー Shihāb al-Dīn Abū al-Riḍā' Aḥmad b. Muḥammad al-Ḥamawī のことを語る際に、次のような記述を残している。

我が父は、彼 (Shihāb al-Dīn al-Ḥamawī のこと) の管轄下で (taḥta yadihi) アインターブの町のカーディーを務めたが、彼が彼 (父) を解雇したので、我々はアレppoに行くことにし、彼が我々に与えてくれる役職について働きかけ、4ヶ月間アレppoに留まったが、彼は役職を与えてくれないばかりか誰の言うことも聞かず、ついには我々の手元にあった3000ディルハム銀貨が失われた<sup>17</sup>。

その後もなくアイニーの父は体調を崩して死亡したと書かれており、そのこともあってかアイニーは Shihāb al-Dīn al-Ḥamawī を「頑固で意地の悪い人物」と非難している。いずれにせよ、以上の記述からはアイニーの父、そしておそらくはアイニーの祖父の役職は、その任免権を含め、アレppoにいるシャーフィイー派大カーディーの管轄下にあったことがうかがえるのである。

再び伝記記事に戻ると、アイニーは父について、「彼は手厚い保護と広く歓待する心が備わっており、特に国を離れてきたウラマーや、家族や子供を置いてきた異邦人に対しては [そうであった]。また物価高騰の折りには一団の孤児たちをかくまってやり、神がこの災厄をムスリムから去らせて下さるまで、彼らに食べ物や飲み物を与えた」と述べ、彼が旅人や身寄りのない者への慈善行為を行っていたことを記す<sup>18</sup>。後に見るように、父の手厚い保護によってもてな

17 *Badr/S*: 165b. ただし、ここでの1人称は、アイニーではなくその弟のアフマドのことである可能性が高い。なお、Shihāb al-Dīn al-Ḥamawī の伝記については *Durar*: 1/227-230 を見よ。

18 この文中にある「物価高騰」とは777/1375,76年の出来事である。少年であったアイニーはこの時、「私はロバやイヌやネコの肉を食らう人を目撃した。またある人は、子供を屠って食らう人を見たという」などと具体的な記録を残している。 *Badr/S*: 101a.

されたウラマーのうちの幾人かは、アイニーの初等教育時代における師としての役割を果たしたと考えられる。

## 5. 学問的キャリア

ここではアイニーの学問経歴を、(Ⅰ)生まれ故郷のアインターブにとどまっていた時期、(Ⅱ)その後のアナトリア東南部とシリア北部を中心とした学問遍歴の時期、そして(Ⅲ)カイロに到達した後の時期という、3つの時期に分けて見てみよう。ただしこのような区分は便宜的なものであり、自著や同時代史料においてなされている区分ではない。

当時のウラマーにとっては、どの教育機関で学んだかよりも、どの師から学んだかが常に重要となった。アイニーについてもそれは例外でなく、彼が学んだ学院(madrasa)について史料中に記されることはまれである一方、彼が学んだ師については比較的多くの記述が残されている。アイニーが師事した学者にかんする情報を、アイニーの自著やその他の同時代史料から抽出し、時期ごとに整理したのが【表1】である。サハーウィーによれば、アイニーは生前「師匠列伝(mu'jam shuyūkh-hi)」なる書を執筆したとあるが[*Daw'*: 10/134; *Tibr*: 3/147]、残念ながらそのような作品は残っておらず、アイニー自著や伝記記事から確認できるアイニーの師はわずか32名であった。「師匠列伝」の作者としては、マムルーク朝のウラマーであるザハビーal-Dhahabiやイブン・ハジャルが有名であるが、それらの作品には数百名もの人名が掲載されている。アイニーの師32名は、それらに比べると小人数であると言わざるを得ないが、それでもこれら32名の学者のデータから、アイニーがそれぞれの時期にどのようにして学問を修得していたかをうかがい知ることはできよう。

### (Ⅰ) 郷里アインターブでの教育

762/1361年に生まれたアイニーは、783/1381,82年にアレppoへ旅立つまでの21年間を郷里アインターブで過ごした<sup>19</sup>。

アイニーが最初に出会った師は、当時の他のウラマーと同様に、自分の父親ということになるだろう。イブン・タグリービルディーが「彼(アイニー)は

【表1】アイニーの師匠一覧

時期	番号	人 名	法学派	分野	教授地	出身地	アイニー 自著中の 伝記記事	※ 1	※ 2	その他の死亡録中の伝記記事
I	1	Aḥmad b. Mūsā b. Aḥmad al-'Ayntābī	Hf	法	A	P	B/S: 128a.	○	○	I: 2/107; M: 2/231.
	2	Mahmūd b. Aḥmad b. Ibrāhīm al-Qazwīnī		書	A	カズウィーン	B/S: 205b.			
	3	Muḥ. b. 'Alī b. 'Ubayd Allāh Ibn Zayn al-'Arab	Hf?	書・読	A	R	B/S: 197a			
	4	Ḥusayn b. Muḥ. b. Isrā'īl al-'Ayntābī	Hf	読	A	A?	B/S: 187b.			
	5	Aḥmad b. Khalīl b. Yūsuf al-'Ayntābī		読・源	A	A?	B/BN: 64a.			
	6	Mikā'il b. Ḥusayn b. Isrā'īl al-'Ayntābī	Hf	法	A	東方	B/S: 216a.	○		
	7	Mahmūd b. Muḥ. b. 'Abd Allāh al-Rūmī		語・解・相	A, P	R	B/BN: 64b.	○		I: 5/125; Da: 10/146
	8	Isā b. Khāṣṣ b. Mahmūd al-Sarmārī	Hf	修・法	A	カフカス	B/S: 138b.	○		
	9	Khalīl b. Aḥmad b. Muḥ. al-Mashriqī	Hf	語	A	R	B/S: 189b.			
	10	Jibrīl b. Šāliḥ b. Isrā'īl al-Baghdādī		解・法	A	D, C	B/S: 201a.	○		
	11	Muḥ. b. al-Rā'ī b. Ibrāhīm al-Marāghī			A	マラーガ?		○		
	12	al-Ḥusām al-Ruhāwī			A	エデッサ?		○		K: 2/10.
II	13	Yūsuf b. Mūsā b. Muḥ. al-Malaṭī	Hf	法・源	P	M	I/Ak: 54b; B/BN: 49a.	○	○	S: 3/1073; Da: 10/335.
	14	Ḥaydar b. Muḥ. b. Ibrāhīm al-Rūmī	Hf	法・相	P	R?		○		Du: 2/82.
	15	al-Wālī al-Bahasnī				B	B?		○	
	16	'Alā' al-Dīn				カフター	?		○	
	17	al-Badr al-Kashshāfī				M	?		○	
	18	Ibrāhīm b. Muḥ. b. 'Umar Ibn al-'Adīm	Hf	ハ?	P	P				S: 3/529; I: 2/192; Da: 1/64; M: 1/171.
	19	Aḥmad b. Muḥ. al-Sayrāmī	Hf	解・法・語	J, C	ヘラート他	B/S: 146a.	○	○	S: 3/588; I: 2/302; Du: 3/588.
III	20	Aḥmad b. Khāṣṣ al-Turkī	Hf	法・ハ	C	?	I/Ak: 87b.	○		I: 6/17; Da: 1/292
	21	'Umar b. Raslān al-Bulqīnī	Sh	ハ・解	C	C	B/BN: 63a.	○		S: 3/1108; I: 5/107; Da: 6/85; M: 8/285.
	22	Muḥ. b. Aḥmad b. Muḥ. al-'Asqalānī	Hf	読	C	アスカロン?		○		S: 3/759; I: 3/96; Du: 3/352.
	23	'Abd al-Raḥmān b. Ḥusayn b. Abī Bakr al-'Irāqī	Sh	ハ	C	Mahrān	B/BN: 68b.	○		S: 3/1128; I: 5/170.
	24	Muḥ. b. Muḥ. b. Muḥ. al-Dajawī	Sh	ハ	C	?	B/BN: 81a.	○		S: 4/48; I: 6/45.
	25	'Abd al-Karīm b. Muḥ. b. Ḥāfiẓ al-Ḥalabī	Hf	ハ	C	P	I/Ak: 87b; B/BN: 81b.	○		I: 6/34.
	26	'Alī b. 'Abd al-Karīm al-Fuwi		ハ	C	?		○		I: 8/56.
	27	Taghrībirmish	Hf	ハ	C	?		○		Da: 3/31; M: 4/56.
	28	'Alī b. Abī Bakr al-Haythamī	Sh	ハ?	C	イラク?	I/Ak: 76a.	○		I: 5/256; Da: 5/200; M: 8/30.
	29	Muḥ. b. Aḥmad b. Ismā'il Naṣīr al-Dīn Aghā		ス	C	Abtina?	B/BN: 50b.	○		I: 4/318; Da: 6/294.
	30	Aḥmad b. Ismā'il b. Muḥ. al-Kushk	Hf	ハ	D	D, C		○		S: 3/885; I: 3/339; Du: 1/107; M: 1/241.
	31	Muḥ. b. Muḥ. b. 'Abd al-Laṭīf Ibn al-Kuwayk	Sh	法	D	イラク	B/BN: 133b.	○		S: 4/475; I: 7/341.
	32	Jalāl b. Aḥmad b. Yūsuf al-Tabbānī	Hf		C	R	B/S: 186a.			S: 3/756; I: 3/87.

※1：サハーウィーによる伝記記事中に言及あり

※2：イブン・タグリービルディーによる伝記記事中に言及あり

法学派：Hf=ハナフィー派、Sh=シャーフイー派

地名：A=アインターブ、B=バハスナー、C=カイロ、D=ダマスカス、J=イエエルサレム、M=マラティヤ、P=アレppo、R=ルーム地方

分野：法=法学、書=書道、読=クルアーン読誦、源=法源学、法=法学、語=アラビア語学、解=クルアーン解釈学、修=修辭学、ハ=ハデ

イスラム学、ス=スーフィズム

史料：I= *Inbā'*, Da= *Daw'*, Du= *Durar*, K= *Ḥajjī Khalīfa*, *Kashf al-Zumūn* (in Gustav Flügel ed., *Lexicon bibliographicum et encyclopaedicum*, 7 vols, London, 1935-58), M= *Manhaj*, S= *Suluk*.

19 イブン・タグリービルディーは、アイニーがその父の没後、つまり784年7月/1382年10月以降にアレppoに旅立ったと記すが、サハーウィーは、783/1381,82年に旅立ったのち一度故郷に戻り、父の没後再度旅立ったと記す。ここではサハーウィーの記述に従う。

アインターブで育ち、クルアーンを覚え、父やその他の者に法学を学んだ (tafaqqaha)」と記し、サハーウィーが「そして彼の父からも法学を学んだ (wa-kadhā tafaqqaha bi-abi-hi)」と述べるように、アイニーにとって彼の父親が、学問上の師として一定の役割を担っていたことがうかがえる [Manhal: 11/193; Tibr: 3/141; Daw': 10/131]。ただし、この父親が具体的にどのような教育をアイニーに施したのかについては、明確な記述は見あたらない。

具体的な教育内容を見るならば、アイニーはまず、クルアーンの読誦法を習得することから学問キャリアを始めた。まず767/1365,66年の条で「私は5歳にしてクルアーンを一部読んだ」[Badr/S: 78b] との記述があり、その後772/1370,71年の条では、「この歴史の筆者である弱きしもべは、この年クルアーンを暗記し (ḥafīẓa)、読誦の師であるシャイフḤusayn al-'Aynṭābīにそれを披露したが ('araḍtu-hu)、私の年は9歳であった」[Badr/S: 91b] とある。Ḥusaynとは【表1】(4) にあたる人物で、「クルアーン詠唱者 (al-muqri' al-mujawwid)」であり、アイニーの生家と同じKaykan街区 (ḥāra) にあるモスクで40年間クルアーン朗誦を続けていた。アイニーは彼から「正統7読誦」<sup>20</sup>を学んだとされる。クルアーンの読誦についてはこの他、アイニーが8歳の時にアインターブに来た (3) にもクルアーンの4分の1 (rub') までを習い、また (5) のもとでも、「私は聖クルアーンを彼の前で読み、Ḥafṣ<sup>21</sup>やその他の読誦法で、始めから終わりまで何度も彼の前で披露した」との記述がある。

クルアーン読誦と並んで、書道もまた幼い頃から学ぶべきジャンルであった。書道の師はアイニーが7歳の時にアインターブに来た (2) であった。(2) は「当代のヤーカート、今イブン・ムクラ<sup>22</sup>」と称される能書家であり、アイニーは父に勧められて彼のもとに通うようになったが、「年齢が幼かったのと、私の努力が足りなかったため、あまりそれを役立てることはできなかった」と語る。彼の他、上述の (3) にも書道を習ったとの記述がある。

その後アイニーはさらに、アインターブ在住の知識人たちから学問を学ぶ。

20 正統7読誦については堀内勝「QIRĀ'A (コーランの読誦) に関するノート」『アジア・アフリカ言語文化研究所』4 (1971), pp. 189-231参照。

21 正統7読誦のひとつ「クーファ派」を代表する人物。堀内前掲論文pp. 211, 214。

22 どちらもアッバース朝で活躍した有名な書道家である。

(9) の人物からは、語形論 (ṣaraf)、文法 (naḥw)、言語 (lugha)、韻律論 ('arūd) などのアラビア語学を学び、(7) から語形論を学んでいる。776/1374.75年頃、アイニーが「成人に達しようとし、分別の付く頃 (munāhiz li-l-bulūgh wa-murāhiq li-l-idrāk)」に、クルアーン読誦の師でもあった(5) から法源学 (uṣūl) を学んだ。(10) からはal-Zamakhsharīやal-Qudūriなどのクルアーン解釈学 (tafsir)、法学 (fiqh) の書を学び<sup>23</sup>、780/1378.79年頃には(6) から法学を学ぶ。そして781/1379.80年には、ハディースとクルアーン解釈学の師である(7) に師事し、アイニーは自著中に、彼からもらったイジャーザ(免状、ijāza)の文章を載せている。

ところで、これらの師のうちで、そもそもアインターブの出身であると考えられる者は、(4) と(5) の人物のみである。その他の師たちは、バグダードやカズウィーン、スルマラー (Surmārā)<sup>24</sup>など東方の地名ニスバを有しているか、またはルーム地方 (bilād al-Rūm) や東部地方 (bilād al-sharq) から来たと明記されている。また、アレppo、ダマスクス、カイロなど、マムルーク朝領域内の大都市で勉学を積んだ者もあれば、アイニーに学問を授けた後でこれらの都市へと向かう者もあった。つまり、これらのほとんどの者が、一時的にアインターブに滞在していたに過ぎないのである。年少時よりこれらの移動するウラマーのネットワークに接していたことは、アイニーのその後のキャリアに大きく影響を与えたであろうし、また実際に彼がアレppoやカイロへと進出する際には、かつての師とのコネクションを大いに利用しえたであろう<sup>25</sup>。

その一方で、これらの師が、アイニーの自著かサハーウィーによる伝記を通してしか人物比定ができない点には注意を要する。つまり、彼らはみな、他の同時代の歴史家たちにとっては知名度の低い、ローカルな活動をするウラマー

23 本稿では、これらアイニーが学んだとされる書物のタイトル等は紙幅の都合から一切省略したが、これらの書名はアイニーの知的活動の全容を把握するためには欠かせない情報となる。これについてはアイニー自身の著作情報と併せて、別の機会に検討する。

24 (8) の人物のニスバal-Sarmārīとは、トビリシとKhulātの間にあるSurmārāに由来するニスバと考えられる [Mu'jam: 3/215]。

25 アイニーはアレppoにおいて(7) から再度教えを受けている。またアイニーがカイロに上った際には、その頃Shaykhūn道場の書庫係となっていた(3) と面会していると考えられる。

であったことがうかがえるのである。むろんこれには、当時のアラビア語年代記、死亡録がマムルーク朝の首都であるカイロで編まれたものばかりであるということも影響していよう。仮に、当時のウラマー社会をカイロを中心とした同心円のネットワークの構造としてとらえるとするならば、アイニーはその円の中心からはほど遠い位置にいたと言える。これらの師たちが、いずれもハナフィー法学派に属する者であった点も指摘しておこう。

## (Ⅱ) 学問遍歴時代

783/1381年、アイニーは、故郷アインターブを離れ、様々な都市での勉学の旅に出る。この時期のアイニーの師匠は、【表1】中の(13)から(19)の人物である。

(13)の人物は東南アナトリアのマラティヤ出身、エジプトに進んで勉学を重ねた後、アレppoにおいて名声を高め、スルターンのザーヒル・バルクーク al-Ẓāhir Barqūq (在位1382-89, 90-99)の要請によりカイロのハナフィー派大カーディーとなるほどの高名な学者であった。アイニーが教えを受けたのは(13)がアレppoにいた頃のこととなる。

サハーウィーによると、アイニーはアレppoで(14)の人物に師事し、相続法を学ぶ。そしてバハスナー、カフター、マラティヤといった東南アナトリアの各地において、(15)、(16)、(17)の人物に師事した。これらから、当時のアイニーが勉学した都市は北シリアから東南アナトリアにかけての地域であったことがうかがえる。

この間にアイニーは、784/1382, 83年に文法学に関する書を著し、786/1384, 85年には法学に関する書を完成させた [Badr/S: 128a, 132a-b]。前者は【表1】(11)ら師の前で披露したとあり、後者については上記(13)の人物によるイジャーズが残されているほか [ʿIqd/Ah: a19/54b-55a; Badr/BN: 49b-50b]、(8)、(18)もイジャーズを出したとある。これらの著述活動が、アインターブで行われたのか、アレppoで行われたのかは定かではないが、両都市に滞在する師からのイジャーズを同時に受けていることから、この時期のアイニーが故郷アインターブと各都市を往復しながら、各地で勉学を重ねていたことがうかがえる。

2冊目の著作を完成させたアイニーは、786/1385年末にメッカに滞在していたことが、自著中の記述から確認できる [Badr/S: 131b, 132a]。ここにいたってアイニーの活動圏は、ヒジャーズ地方にまで広がったことになる。当時ウラマーにとってのメッカ滞在とは、勉学や人的交流のための重要な手段であったことが知られているが<sup>26</sup>、この時アイニーがメッカで、どのような人物に会ったか等の情報は残されていない。しかし788/1386,87年、メッカからの帰途に参詣のため立ち寄ったイェルサレムにおいて、上記リストの(19)の人物であるサイラミーと出会う。この人物は、東方 (al-bilād al-sharqiyya) 出身でヘラート、ホラズム、サライ、クリミア、タブリーズで活動していた。マールディーン滞在中に、スルターン・バルクークが新たに建造した学院の長老として招聘を受け、カイロへ向かったが、その途上でアイニーと出会ったという。アイニー自著では、この時の出会いは次のように語られる。

私はイェルサレムに参詣に来ていた。長老(サイラミー)のことは耳にしており、会ったことはなかったが、私の心には大いなる憧れがあった。(中略)彼の高弟たちが私に、エジプトに付いて来るよう勧めたが、それは私にとって本意ではなかった。と言うのも私は参詣を終えて故郷へ戻るつもりでいたのである。しかしこの方と会ってから、私は故郷も家族も捨てて、イェルサレムには10日ほど滞在してともにエジプトへと向かったのであった。[Badr/S: 137b-138a]

以上、アインターブを最初に離れてエジプトに入るまで、アイニーの遊学期間における活動を見た。この期間のアイニーは、東南アナトリアからヒジャーズにいたるまでの広い範囲にわたって学問遍歴を積み重ね、上記リスト(13)、(19)のように、マムルーク朝の首都カイロでの高い地位を有する高名な学者からも教えを受けた。どちらもハナフィー法学派に属するこの2人の師以外には、他史料から比定しうる人物は確認できず、そのことは彼らがカイロを中心とする知的ネットワークの中では知名度が低く、ローカルな学者であったことを示していよう。言い換えれば、この時期のアイニーは、ローカルなウラマー

---

26 「知識を求める旅」としてのメッカ巡礼については、湯川武「ウラマーの遊学の世界」『歴史のなかの地域(シリーズ・世界史への問い8)』(岩波書店, 1990) pp. 242-243を参照。

集団の中で、ハナフィー派学者のネットワークを糸口に、カイロという学芸の中心地への進出を成し遂げた、と見ることができる。

### (Ⅲ) カイロ到達以降

初めてエジプトの地を踏んだアイニーは、サイラミーの庇護のもと、バルクーの建造したザーヒリーヤ学院 (al-Madrassa al-Zāhiriyya) のスーフイーとなった。この学院は、法学やクルアーン読誦法を教える教育機関であると同時に、60人のスーフイーを寄宿させる修道場 (khānqāh) としての機能も有していた<sup>27</sup>。アイニーはそのような場で、スーフイーとしての資格で勉学に携わることになったのである。

そして788年9月/1386年9-10月には学院におけるハーディム頭 (khādim khuddām-him) の役職を任される<sup>28</sup>。アイニーはこの職を、「利益が得られること (al-iktisāb min fawā'id-hi) や、夜も昼も彼とともにいられること」のために引き受けたと語っている。この場合の「利益」とは、勉学のための利点との意味に解される。

しかし、790/1388年にサイラミーが没すると、有力アミールのJarkas al-Khaliliの不興を買って学院を追放され、故郷アインターブに戻ることを余儀なくされる。アインターブはこの時期、アミールMintāsh反乱軍による攻撃にさらされていたが、その間アイニーは文法学の書を執筆する [Badr/S: 180b]。その後793/1390, 91年、再度カイロに上京し、794年3月8日/1392年2月2日、新たに総督となったアミールSūdūn al-Ṭuruntāyとともに市場監督官としてダマスカスへ赴任する機会を得る [Badr/S: 194a-b]。その後しばらく、アイニーがどこにいたのかに関する情報は途絶えるが、800/1398年にエジプトの巡礼団とともにメッカ巡礼に赴くとの記述があり [ʿIqd/Ah: a19/12a, 14a; Badr/BN: 10b]、その後801年12月1日/1399年8月3日にカイロの市場監督官に就任する

27 Berkey, *Transmission*, pp. 57-58.

28 「ハーディム」という語には一般に宦官、奴隸という意味があり、この時代の学院におけるハーディムもそのような意味で用いられることが多い。しかし、当時のハーンカーにおいては、寄宿するスーフイーの中から選ばれて長老のために働く召使いとしてのハーディムの例も見られ、アイニーが任命された役職は後者の意味合いであると考えられる。



[*Iqd/Ah*: a19/26a; *Badr/BN*: 23b]。この後アイニーは、いよいよカイロに地歩を固めて社会的地位を高めていくのである。

アイニーが初めてカイロに入って以降に彼が教えを受けた師としては、13名の名が確認できる。これらの師の中には、シャーフィイー法学派に属する学者が少なくとも4名含まれている。その中には、「当代のハーフィズ」<sup>29</sup>とのあだ名を持つハディース学者の(23)や、「イスラームの長老 (shaykh al-Islām)」と呼ばれた(21)など、高名なハディース学者がおり、アイニーは彼らからブハーリーを初めとする「六書」の講義を聴講したとの記述がある。これらの有名人をはじめ、この時期アイニーが師事した人物は、スーフィズムの師である(29)を例外とすれば、そのほとんどがハディース学の師である。ここには少しでも「高いイスナード (伝承経路)」のハディースを獲得しようとする、ハディース学者としてのアイニーの意図が見えてこよう<sup>30</sup>。

教えを受けた時期がはっきりしている人物を挙げるならば、(21)～(23)の人物からは、788/1386,87年から790/1388,89年頃に教えを受けている。(32)の人物についてはアイニー自著中に、791年3月24日/1389年3月22日にイジャーズを受けたとあり、また(29)の人物からは791年3月27日/1389年3月25日付で「スーフィーのタリーカのための外衣 (al-khirqa 'alā ṭarīqat al-ṣūfiyya)」を授けられたとある。アイニーが学院を追われ故郷へ向かったのは791年4月29日/1389年4月26日以前であることから [*Badr/S*: 149b]、カイロを離れる直前までアイニーの勉学は続けられていたことが分かる。続く(30)、(31)の人物は、いずれもダマスカスに在住する学者であり、サハーウィーはこれらの人物から教えを受けたのは794年3月/1392年1,2月以降と記している。その後、(24)、(25)からは804/1401,02年、(26)からは808/1405,06年に教えを受ける。

このような時系列の活動に注目すると、アイニーが短い期間で多くの人物に師事している様子が分かる。それがもっとも集中するのが、最初にカイロに滞在した788/1386年から791/1389年の間であり、この間にアイニーは(19)のサイ

29 「ハーフィズ」とは一般にクルアーンをすべて暗唱する者を指すが、10万件以上のハディースを暗唱する者という意味で用いられることもある。Berkey, *ibid.*, p. 186.

30 直接師に会って学ぶことを重視するハディース学者の心性にかんしては、森山央朗「知識を求める移動：ハディース学者の旅の重要性の論理」『歴史のなかの移動とネットワーク』（メトロポリタン史学会編、桜井書店、2007）pp. 90-96を参照。

ラミーを加えると、少なくとも6名の師に付いていたことになる。また、794/1392年からおよそ1年間のダマスカス滞在の間に、(24)、(25)の2人の人物に師事している。そして、801/1399年以降はカイロに安定した生活基盤を築くアイニーであるが、それ以降は上記リストの(24)～(28)の5名を除いて、新たな師を求めることはなくなるのである。この頃をもって、アイニーの勉強時代は終わりを迎えたとも言えよう。

さて、この時期の師13名は、同時代の他史料からも伝記が確認できる、いわば著名人揃いである。この時期のアイニーが、カイロを中心とする知的ネットワークの中心部に接触し得たということは間違いないだろう。アイニーが、ローカル、ハナフィー派という限定されたネットワークを超えて、カイロのシャーフイー派人脈にまで到達したことが見て取れる。

## 6. アイニーの学問的キャリアの特徴

以上で、アイニーの前半生にかかわる、その出自と学問的キャリアを詳しく見てきたが、彼のキャリアはマムルーク朝ウラマーの中においてどのような特徴を持っているだろうか。

まず出自を見ると、曾祖父の代にアンカラからアインターブへと移住してきた家系ではあるが、彼らがトルクメン遊牧民の子孫であることを示す証拠はない。むしろ、祖父、父親ともに、イスラーム法学や地方行政に携わる「カーデー」であり、アイニー自身も幼い頃からアラビア語の環境の中に育ったと考えられる。ただし、当時のアナトリア地方はアラビア語とトルコ語の2言語の併用が一般的であり、アイニーは特別な教育を受けなくとも、それらの言語を解するようになっていたのだろう。

就学年齢についてみるならば、マグリブ地域を中心とするウラマーの一般像を提示した私市正年の研究が参考になるだろう。私市によれば、ウラマーは通常「5歳から8年間かそれ以上、クッターブ（あるいはマクタブ）と呼ばれる初等学校で学」び、そこでは先生が「アラビア語の文字の書き方を教え、コーランを暗唱させる」とする<sup>31</sup>。5歳でクルアーン学習を開始したアイニーは、私市のパターンに準じていると言えるだろう。また、10-12世紀のニーシャープー

ルのウラマーを対象とするBullietの研究は、平均的なウラマーが学生となるのは4.8歳から10.2歳の間であり、その後平均して16.9年間勉学を続けたという<sup>32</sup>。アイニーの場合は、5歳からのクルアーン学習という点では、Bullietの提示した平均的コースのもっとも早い部分に位置づけられる。しかし、第一次のカイロ滞在が終わるのが28歳（ヒジュラ暦の満年齢）、ダマスクスへ市場監督官として赴任するのが31歳、カイロの市場監督官となるのが39歳となり、いずれにせよ、5歳で勉学を始めたアイニーにとっては、Bullietの平均値よりは遅い独り立ちであったといえるだろう。ただし、私市とBullietの研究は、アイニーの事例とは対象とする地域も時代も異なっているため、安易な比較は避けるべきである。

それではアイニーと同地域・時代の具体的なデータを探すならば、同時代人のイブン・ハジャルの例がある。彼は自らの学問遍歴にかんして、「5歳になるまでクルアーン学校には行かず、クルアーンを暗誦し終えたときには9歳になっていた」<sup>33</sup>と語っている。これはアイニーがクルアーン読誦を開始した年齢、およびクルアーンを暗記した年齢と偶然にも一致している。アイニーとイブン・ハジャルの例は、マムルーク朝ウラマーにとってどれだけ一般化が可能な事例なのか、今後の研究にゆだねたい。

受けた教育の内容に関してみると、アイニーは郷里でのクルアーンの読誦と書道にはじまり、アラビア語学、法源学、クルアーン解釈学、法学へと進み、カイロ上京後はもっぱらハディース学の習得に励んでいる。これらはいずれも「伝統的諸学」とされるものであるが、その一方の形而上学や数学など「哲学的諸学」<sup>34</sup>については、アイニーがこれらを師から学んだとする情報がほとんどない点には注意が必要である。祖父の代から地方官僚を務め、自らも市場監督

31 私市正年「法の担い手たち」『イスラム・社会のシステム』（佐藤次高編、筑摩書房、1986）p. 46.

32 Richard W. Bulliet, "The Age Structure of Medieval Islamic Education," *Studia Islamica* 57 (1983), pp. 108-111.

33 D.F. Reynolds ed. *Interpreting the Self: Autobiography in the Arabic Literary Tradition*, Berkley, 2001, pp. 80-81. 和訳は菊池忠純「マムルーク朝時代末期の歴史家をめぐる知的環境：アブドル＝パースイトにとってDhaylを書くということと自伝的記述について」『関西アラブ・イスラム研究』2（2002）, pp. 47-49より、一部表現を変えて引用した。

官等の官職を歴任したアイニーであれば、算術や天文学等に通じていなかったとは考えにくく、さらに歴史家として知られるアイニーが歴史学を師から学んだという情報が全く見あたらないことも奇妙である。これについては、アイニーが独学でこれらの学問を習得していたという可能性があるだろう<sup>35</sup>。

師たちとの関係を見るならば、アインターブにおいて移動するウラマーのネットワークに接していたアイニーは、東方出身者、ハナフィー法学派といった地縁・法学派のつながりを利用して、政治と学芸の中心であるカイロにまで至った。カイロ到達後は、すでに名の知られたハディース学者たちに師事し、彼らからのイジャーズを授かることによって、自らの学者としてのステータスを高めようと努めていた様うかがえる。

本稿で見たアイニーの前半生は、カーディーあるいは地方官僚の一家という出自や、地縁・法学派のネットワークを利用しつつ、ウラマーとなるのに必要な通過儀礼を重ねることで、知識人世界での自らの地位を高めていく過程にあったことが見て取れる。先行研究が指摘するような、支配エリートとの良好な関係を取り結ぶことによって政治的・社会的な地位を向上させたアイニーの姿は、彼の後半生に限られるものと言って良いだろう。ウラマーとしての地位を築いたアイニーが、どのようにして支配エリートとの関係を築いていったのか、彼らとの関係がアイニーの政治的キャリアにどう影響していったのかについては、稿を改め検討することとする。

34 伝統的諸学、哲学的諸学の区分については、イブン・ハルドゥーンの学問分類によっている。湯川武「イブン・ハルドゥーンの教育論」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』11 (1979), pp. 219-221を参照。

35 たとえば【表1】(31)のIbn al-Kuwaykは、アイニー曰く「al-Mizzī, al-Birzālī, al-Dhahabīが彼にイジャーズを与えた」[*Badr/BN*: 133b]という人物であり、これら3者のうち後2者は、「シリア学派」を代表する歴史家として有名である。拙稿「アイニーの2年代記」pp. 054-055, 062 n. 39で述べたとおり、アイニーの歴史書にはイブン・カスィールIbn Kathīrなど「シリア学派」の歴史家による書からの引用が多く見られるが、アイニーはIbn Kuwaykを通して「シリア学派」の学統につながり得たのかも知れない。ただし、アイニーがこの人物から歴史学を学んだとの情報は確認できず、アイニーと「シリア学派」との関係は、現存するテキストの文献学的比較の作業を待たねばならない。

**【付記】**

本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）「中世アラブの書物と文化：アラビア語写本・文書史料による文献学的研究」（2008-2010年度、課題番号20720190）の成果の一部である。